

川田熊太郎論集 3 『西洋中世哲学』

公論社，昭和60年，322頁

中村 友太郎

本書は、当学会の最初期からの会員であり、昭和56年に行年82歳で逝去された著者の没後に刊行された論集全3巻の中の『西洋古代哲学』1・2に続く最終巻である。ここに収録された論文は、付録の3篇を含めて14点あり、大正14年の『哲学雑誌』掲載のもの（付録1，Kantの範疇論）から、昭和50年『駒沢大学仏教学部論集』第6号に寄せられた論文「“Creatio ex nihilo”の起源」にいたるまで、実に半世紀にもわたる長い期間に書かれたものである。したがって、各々の執筆時期を考慮した、わが国の研究史的な観点からみて十分適切な書評は、とうてい筆者の力量の及ぶところではない。ここでは専ら集録された素材をそのまま現時点から少しく概観するにとどめたい。

比較哲学の形成と確立に専念した著者の立場からすれば当然というべきであろうが、編集者によって「中世哲学」の研究としてまとめられた各論文は必ずしもうまくこの表題の枠内に収まるものではない。また、冒頭に掲げられた「思想形態論考察」（昭和19年『理想』第156号所収）と「終説——日本における西洋哲学の受容の仕方」（『東洋思想講座Ⅱ』至文堂，昭和33年）とは、専ら著者特有の比較哲学の研究方法を展開してみせた事例であって、一般的意味での「西洋中世哲学」の研究論文とは言いがたいであろう。しかしながら、これらに見られる研究への取組みの姿勢と西洋と日本の思想全般に対する根本態度の理解を抜きにしては、やはり他の諸論文にも貫徹している著者の丹念な文献学的な探究の本来の意図も見失われることになる。

中世哲学に直接かかわらないという点で、「ショレムのブーベル批評」（昭和47年）と題された小論も、さしあたりは別個に読まれるべきものであろう。メシア思想研究者としてのG. ショレムとM. ブーベルという現代ユダヤの二大思想家にごく簡単に触れたこの評論は、すでに70歳を越えておられた著者が、仏教への関心と欧州哲学の考察の彼方に、比較哲学的構築の関心からヘブライ思想にもますます興味を深めておら

れた名残りを留めたものと見たい。私事になるが、学部で学生であった当時から少々距離を置きながらも先生の言行から哲学研究の根本態度を多々学ばせていただいた筆者が、偶々上野毛のお宅にお邪魔した折、結局じかに拝見させていただく機会を失したのではあるが、著者がユダヤ思想に関する文献をせっせと収集しておられたのは、この論文が執筆された頃だったと記憶している。

法蔵館版の『川田熊太郎比較思想研究 1・2・3』と密接にかかわる、上述の比較哲学的考察の 2 点の論文にまず注目した上で、次に、表題から見ても明らかに中世思想の研究に関係している他の 8 篇の論文を掲載順に概観してみたい。

第二次世界大戦中(昭和19年)、著者が東京文理科大学で教えておられた頃に書かれた「思想形態論考察」は、「西洋の師表」たる、思想の形成力豊かなるアウグスティヌスの一つの根本モデルとして、〈思想形態論〉〈思想形態決択論〉〈思想形態組織論〉という三部門から成る著者固有の方法論の素描を展開してみせる。そして古代ギリシアの代表としてのアリストテレスの学との対比において、根本的歴史的に対立しあう哲学の二つの見方のあることを指摘する。すなわち、「哲学をもって行為の原理を定めるものとするのと、理性的原理によるすべての物の説明とするのとの二つ」である。近代の日本人が置かれている思想史の状況がこのような比較哲学ないし思想形態論的考察を要求していると考える著者は、戦後(昭和25年からは東京大学教養学部の教授として)、自然の秩序を考察する「愛知」(西洋哲学)と心の秩序を考察する「知見」(仏教学)の二つの柱を基本とする「比較哲学」を提唱することになった。このことは多くの方が先刻ご承知のことであろう。

このような観点から〈日本における西洋哲学の受容の仕方〉を論じた「終説」においては、日本思想史の在り方への反省と西洋哲学の徹底的認識の努力の二重の必要性が強調され、とりわけ従来の西洋哲学の「受容の一面性」を修復するために、古代とこと中世の思想潮流の大綱の根本把握の重要性を指摘している。とくにプロテスタント・キリスト教の地盤から生じた近代哲学に専ら傾いて、ヨーロッパ中世の哲学が軽視ないし無視されてきたというこの洞察に関しては、付録3。「道徳と宗教」の前半部が格好の補足を提供してくれる。なお、その後半部は、西洋の〈神の宗教〉に対して仏教の〈法の宗教〉を対置しての比較考察の展開になっている。

この論集の各々の著述は、いずれも比較的コンパクトではあるが巨視的な洞察への意欲に富んだ気迫が込められている。後続の研究者としては、このようにして提供さ

れた土台を足掛りにより詳細で厳密な研究を推進させてもらえる点で、大いに感謝したい。「中世哲学」研究の8篇の中で最も長い(40ページ)「二種のイデア論」にはく比較哲学的研究」という副題がやはり付けられており、先の「終説」と同じく昭和33年に書かれたものである。東大教養の『人文科学科紀要』哲学Ⅳに掲載されたこの論文は、これまでわが国では看過されがちであった〈キリスト教哲学のイデア論〉のテーマを扱う部分を骨子として、この新しいイデア論の思想的意義づけを目指している。この主要部分にあつては、アウグスティヌスとトマスにおけるそれぞれのイデア論を基本テキストの邦訳と解説を通じて考察し、古代ギリシアの *to on* に対する *ho on* の哲学、つまりキリスト教哲学の道の生起したことを確認している。そしてさらに、東方の仏教学を視界に置く比較哲学者として、次のような言葉で結んでいるのである。「これを知る時、我々にはかえってキリスト教哲学の道から、殊にギリシア哲学の道から出てインド哲学へ通ずる道が厳然として有る事を見出すのである。これは歩むに極めて困難な道である。しかしこの道は歩まなければならない」と。

このあとに続く二つの論文「トマス・アクィナスのイデア論について」と「ボナヴェントゥーラのイデア論」は、先の議論の補充としての研究成果と見なされるが、いずれも初期の『中世思想研究』(昭和33年と35年)に載せられたものである。前者については、著者自らトマスのイデア論そのものの解説ではなく、それをめぐる周辺からの考察であると断っており、体系論のおよび系統論の考察を踏まえてその実体にせまり、唯一神論的形相主義 *theistischer Eideticismus* ないしは *hyperphysism* のイデア論であると規定する。同時にこの小論は、アウグスティヌス以後のキリスト教と新プラトン主義の接点としての偽ディオニュシウスの問題にも触れて、トマス思想の根底にあるアリストテリズムとネオ・プラトニズムとの統一性への、さらには欧州哲学の自己完結性への再考の可能性を示唆している。

他方、「有りて在る者」すなわちホ・オーンのイデア論の考察を補充するために進められたボナヴェントゥーラ の思想の研究に際しても、彼のイデア論の体系的位置づけ・本質把握・源泉ないし系統という三方向からの考察がなされ、将来の拡張された比較研究に備えるという手順が繰り返されている。ここでは序論と結論の双方で、いつか西洋の二種の存在がインド哲学の *sat* (有) および *na sanna cāsat* (非有亦非無) と対比されて明瞭にされることが期待されている。

著述年代順に並んでいる その次の「古代より中世へ」(中村元編『自我と無我』昭

和38年所収)は、この論集ではやや長めの論文であるが、古代ギリシアと聖書と中世哲学のそれぞれにおける「我」の系譜を比較考察している。この論の中世に関する箇所は極めて簡潔であるが、究極の我たる聖書の神を「創造因」として、ギリシア哲学の「形相因」と「質料因」とをその下に従属させる道を開拓したアウグスティヌスが残したその統一のいかにの問いにトマスが見事に解答を与えたことを示す。すなわちアリストテレスのヌースが自己自身を思惟するのに加えて、同時に他のものどもを思惟することを追加して、いわばアリストテレスに洗礼を与えたのだとみる。なおこの論の結びには、ブーベルの書『我と汝』はアートマンや我の思想との関係においても深く注目されるべきものとの指摘があり、ハシディズムやユダヤ教神秘主義への著者の関心がその片鱗をのぞかせていることに注意したい。

さらに残る4篇は、それぞれ2点ずつ「エックハルト研究」と「虚無からの創造」論に関するものである。これらは、著者によるその後の中世思想研究の関心がどこからどこへと移動していったかを示す里程標に相当する著述とみてよいであろう。すなわち、前二者では Gottheit (神元) をめぐる比較哲学的考察が焦点であり、その欧州の伝統的形而上学・神学との関係ないし位置づけを明らかにして未来の世界哲学史の構築に寄与せしめんとしている。また、著者の70代における *creatio ex nihilo* 研究は〈ヨーロッパ哲学の原理論の変革〉という見地からなされたものである。古代ギリシアの哲学者たちが無からは無としか考えていないのに対して、アウグスティヌスからボナヴェントゥーラへとキリスト教の思想家は、質料が原理であることを明示的に断固拒否する。質料も虚無からの被造であって唯一なる究極の原理と比肩するものではないと。ここでは、このようにカトリック神学・哲学の正統説による解釈が考察され、その上で神的実在と nihil の関係等に多義性の認められることから、今後の世界思想史的研究と解釈の発展が待たれることを示唆して結びとしているように判読される。

論集全体を通じて最も印象深いことは、思想史研究にあたって考察者自身の立場の明確な自覚と、異質的な対象にも徹底した理解を深める手段としての文献解釈の貫徹とのバランス感覚の浸透していることであろう。